

# 皆<sup>みな</sup>実<sup>み</sup>抄

## 所 思

「戦後二十年」ということばが、このごろあちこちで聞かれるようになった。年数の二十にさほどの意味があらうとは思われぬが、世界史の歩みのうえからみて、ことし千九百六十五年が、ひとつの大きな転機にさしかかっていることは、ひしひしと身に感じられるような気がする。そう思うと、「戦後二十年」ということばは、やはり重いひびきをもって、われわれに迫ってくるのである。

敗戦の痛手をうけた身を、郷村の妻子のもとに運んだ日、駅頭に出迎えていた子どもらの顔を見たたん、こいつらのために、おれはまだ生きねばならぬ、と自分にかたく言いかけたことを、きのうのこのように思いかえす。あれから二十年、私事はさておき、その間の祖国再建の苦しい歩みは、とりわけ教育制度の改革にもなうさまさまの模索をおして、おたがいの骨身に徹してきているはずである。

こんにち、日本の産業や経済はすばらしく発展し、国をあげて太平の気に酔っているようにも見える。しかし、そのかげに、何か重大なことが取り忘れられてはいはしないだろうか、そういう不安をおぼえるのは、わたくしひとりではあるまい。その「重大なこと」が何であるかを、年頭にあたり沈思したい。

ある詩人が、その近業の詩集を贈ってくれた。その扉に、「自叙」と題するつぎの短章が書きつけてあった。

世のあらゆる声高なもの後ろにあってきて お前は  
どんな重大なことを思ひめぐらしてゐるのだらうか

自嘲めく口調のうらに、同憂の嘆きをきく思いがする。

(昭和四十年一月)